丹羽兌子・東晋次　両先生　追悼特集

丹羽先生の思い出

都築晶子
榎本あゆち

丹羽兌子さんが二〇二一年十二月に逝去された。一九三九年生まれ、享年八十二歳。東晋次さんが同じ年の十月に急逝された。丹羽さんにもお知らせしようと、メールアドレスを確認するため主催されていた折り紙教室のホームページを開いた。九月一日付けのブログに「最近体調に不安を感ずることがありますのでブログの更新はしばらくお休みさせていただきます。元気に再会できる日を楽しみにしています」とあった。お元気になったらと思っているうちに、丹羽さんの訃報に接することになった。

丹羽さんはご実家のこまどり幼稚園の園長さんだった頃から折り紙作家として活躍され、折り紙について三十数冊の著書も出版されている。ただ、知っている方はもう少ないだろうが、それ以前の一九六七年六月から一九七五年三月まで、東洋史研究室の助手をしておられた。丹羽さんを指導された宇都宮清吉先生がよく研究室を「めだかの学校」に喩えておられた。「誰が生徒か先生か、皆でお遊戯しているよ」と。私たちはめだかの中でも子めだかで、大めだかの後ろに付いていくのが精一杯、お遊戯している余裕はなかった。その中で丹羽さんの存在はとても大きかった。

丹羽さんと学友だったのは安田二郎さん、東晋次さんである。お二人がもしご存命であればきっとその立場からもっと相応しい追悼文を書かれたろう。結局、私と榎本さんの二人で追悼文を綴ることになった。堅苦しい文章は故人にふさわしくない。当時の子めだかがそれぞれの思い出を対話形式で

述べることにした。故人を偲ぶよすがになれば幸いです（都築晶子、以下、「都」と表記）。

（1）研究室で

＊私が丹羽さんにお会いしたのは、一九六七年に学部に進んだときのこと、安田さんと東さんから東洋史の助手だと紹介された。丹羽さんは全くの自然体でまだ学生のような雰囲気をまとっていた。すでに結婚されていて、「サントリー会」が機縁になってご主人と結ばれたという。サントリー会と聞いて、サントリーウィスキーの角瓶が目に浮かんだ。その頃は学生がちょっと贅沢をして飲めるウィスキーが「角瓶」だった。丹羽さんはそうじゃないと笑った。「山鳥会」という山歩きの同好会があって、まあサントリーウイスキーも同行したから「ヤマドリ」ではなく、「サントリ（ー）」と呼んでいたという。山鳥なのか、ウィスキーなのか、どちらが目的だったのか。私が大学に入った頃は大学紛争が吹き荒れていた時代である。東洋史研究室にはこうしたのどやかな世界があるのだと、つくづくとうらやましかった。

私は大学紛争の中をうろうろとし、結局、修士は三年間かかった。修論は今日までもなお続く遅筆がたたって、締め切りに間に合うかどうかという事態に追い込まれた。丹羽さんは大学院生数名を清書の手伝いに自宅に送り込んでくれた。丹羽さんご自身の代わりには、ご主人が手伝ってくださった。今でも何だか申し訳ない思いがする（「都」）。

＊四期生となる直前（一九七〇年夏）の研究室訪問だったか、初めて丹羽先生にお会いした時、「女性の先生がいるのだ、これは珍しいし、なんだかホッとする」と感じたものでした。文学部とはいえ、女性教員はごく少数ではなかったでしょうか？そんな時代でした。そんなこともあってそのまま東洋史研究室に入り、丹羽先生には本当に色々なことを教えていただきました。その例を二つ。

・佩文韻府の引き方、「おけつ（熟語の下の漢字）から引くのよ」と教えてくれたのも丹羽先生。

・「隠・桓・荘・閔・僖・文・宣・成・襄・昭・定・哀」、春秋魯の君主名ですが、「これを覚えておくと、〇公×年というのが、大体春秋のいつ頃の話なのか、左伝のどこにその記事があるのか分かりやすくなるから、思えておきなさい」というアドバイスをしていただきました。これは宇都宮先生直伝の「技」だということでしたが、実

際春秋期の典故を調べる際には、大いに役立ちました。

ある時、谷川先生が、「今号の文学部紀要に、東洋史からは投稿がない、こりゃまずい」との発言があり、それを受けて丹羽先生が、「では私が書きます」と即答、「すぐに書けるというのは、蓄積があるからだなあ、これがプロというものか」と感じ入った記憶があります。当時の私は、卒論テーマを何にするか煩悶のさなかにありましたので、特に印象深かった次第です。因みにその時丹羽先生が投稿されたのは、「蔡邕伝おぼえがき」です（榎本あゆち、以下「榎」と表記）。

＊当時、女性の教員には、他に中哲研究室の助手・小守郁子先生がおられました。文学部には女性の助手が二人いたことになります。小守先生は丹羽さんよりかなり先輩ですが、丹羽さんと同じ年の四月に亡くなられました（「都」）。

（2）石徹白（いとしろ）の合宿にて

＊私が院生だった頃から、ふとした機縁で石徹白（現、岐阜県郡上市白鳥町石徹白、白山国立公園の南麓に位置する）の大きな民家を改装した某氏の別荘を借りて、毎年のように夏合宿を行っていた。丹羽さんは数人いた女性を率いて手際よくご飯の準備をしていた。料理のできない私は、丹羽さんが鶏の骨付きもも肉をあっという間に調理するのに見惚れ、どうしてそんなにすばやく調理できるのと愚かな質問をした。丹羽さんは苦笑い、仕事から帰ってすぐに子供たちに食べさせるためよと。いつだったか、夕食の手伝いをさぼったため、その翌日、丹羽さんは女性陣と石徹白の大杉を見に行き、私は留守番をして昼食の準備をすることになった。早めにチャーハンを炒め始めたけれど、大人数分を一挙に炒めようとしたため、プロパンの火力ではなかなか終わらない。某氏がおナカがすいた、まだかまだかと覗きにくるので、ますます焦った。そのうち女性陣が戻ってきて、結局、丹羽さんがあっという間に完成させてくれた。この頃は、料理は女性と決まっていたような気がする。また、それが当たり前の時代だった（「都」）。

＊上記都築さんのチャーハン事件の翌年、私は初めて石徹白合宿に参加し、今は亡きJR越美南線（現長良川鉄道）に乗り、美濃白鳥駅下車。まずは食料の買い出し。丹羽先生の指示で、肉屋で大量の豚の小間切れ購入、あと何を買ったかは忘れました。石徹白ではキャベツなど野菜類購入、到着当

日の夕食は近所の民宿で会食。次の日から丹羽さんの奮闘が開始される。昼食だったか夕食だったかよく覚えていませんが、ロールキャベツを作っていただきました。ロールキャベツといっても、中身は豚ひき肉ではなく、昨日買った豚小間、ザクザクと刻んで塩コショウ、茹でたキャベツの葉でくるんでしばって煮込むだけ、美味しかったです。豚小間もいいものならこれで十分。丹羽さんの手際の良さと時短メニューにその時は感心するばかりでしたが、後になってはっと気が付きました。あの時短メニューは、研究と家事の両立という必要性から生み出されたものだと。なお男性陣の名誉のため付言しますが、調理は丹羽さんを中心として我々女性陣が手伝いましたが、後片付け・洗い物は男性陣が引き受けてくれました。その音頭取りは清水稔氏と東さんだった記憶があります。

そのロールキャベツを煮る時、またそのほかの調理の際には、丹羽さん持参の巨大な中華鍋が使われました。初めて見た時はちょっとびっくり、どこにあったのかと考えていましたが、丹羽さんのご実家円福寺の庫裏からではなかったでしょうか。お寺での法事などで、大人数の調理も珍しくなかった時代です。その中華鍋をこれまた大きな唐草模様の風呂敷の対角線上におき、クルクルとくるむ。その風呂敷の両端をしぼって棒状にし、たすき掛けに亀の甲羅のように背負ったりたり、腕にぶら下げたりして運んでいた姿、懐かしいです。

合宿中、同窓の平野佳代子さんと丹羽さんとの三人で、石徹白の大杉を見に行きました。やっとたどり着いた大杉の根元で、樹齢が千数百年とか話題になった時、「この杉が生えだした時、曹操は生まれていたかもね」と丹羽さん。さすが、蔡邕や潁川荀氏の研究者らしい発言と思ったのは、後の事。その時には疲れ果てて、ただただ杉を見上げるばかりでした（「榎」）。

（3）ご自宅訪問・タケノコ

＊丹羽さんは、春になるとご実家の裏山にあるタケノコを採って、ご自宅でタケノコ料理をふるまってくれた。研究室の誰もが一度は招かれたことがあっただろう。タケノコの下ごしらえはなかなか手間ひまのかかることだが、そんな苦労もみせず、ごく自然にこなしておられた。新鮮なタケノコが美味しかったことはいうまでもないが、部屋の長押に棚を張り巡らせて文庫本が並んでいたことが印象に残っている。お手製の棚だったのだろう。研究者が（丹羽さんとご主人の）

二人もいるので、本の置き場に困るからと笑っておられた（「都」）。

＊院生時代のいつだったか、高蔵寺のご自宅を訪問し、ご実家のお寺境内に生えているタケノコをご馳走になりました。取れたてのタケノコは、ただの水でゆでるだけであんなにおいしとは、初めて知りました。

それとともに、丹羽さんが研究室にいる時と、ご自宅でお子さんたちに対する時とで、全く雰囲気が異ならないのにも、妙に感心した覚えがあります。研究室で我々院生・学生に対する時も、どことなく柔らかい母のごとき雰囲気を漂わせていたということか、それともこちらが子供だったのか？（「榎」）

（4）その業績について

中国中世史研究会『中国中世史研究―六朝隋唐の社会と文化』（東海大学出版会　一九七〇）は、出版当時、歴史畑ばかりでなく、中国文学の研究者の間でも大きな話題となっていたようです。東京女子大・中国文学の安藤信廣先生からその事を知らされた時、「では、あの本の中のどの論文が一番印象的でしたか？」と尋ねました。先生は「丹羽さんの荀氏の人々です」と即答されました。谷川・川勝でも誰でもなく、丹羽さんでした。私は各地流転の後四五年ぶりに名古屋に戻りましたが、このことを名古屋に帰ってきてから間もなく開かれた飲み会の席上丹羽さんにお伝えしました。丹羽さん、ちょっと嬉しそうでした。それが、丹羽さんにお会いできた最後でした。よかった、お伝え出来て（「榎」）。

（5）ワレモコウ

いつだったのか、どんな話しの流れだったのか、忘れてしまったが、丹羽さんが私はワレモコウの花が好きなのと呟かれたことがある。ワレモコウという花を知らず、どんな花なのかと尋ねた。とても花とはいえないような地味な目立たない花を付ける野草で、その花を見た人が私もまたこうなのだと「ワレモコウ」と名付けたと説明してくれた。そして「私もまたこうなのよ」とご自分を指さした。

ずいぶん後になって、ワレモコウは「吾亦紅」と表記し、高浜虚子に「我も亦紅なりとひそやかに」という俳句があることを知った。丹羽さんはひそかに「紅」の意味を込めて呟かれたのではないか、今はそう思う（「都」）。

合掌

（つづき　あきこ　龍谷大学名誉教授）
（えのもと　あゆち）